

# アートコレクターとしての 四島司についての調査研究

—「四島コレクション」の記録を通して

Research and studies of the art collector “Shishima Tsukasa”

—Through making documentation of “Shishima Collection”

芸術研究科 造形表現専攻  
芸術表現領域 博士前期課程  
2025年3月修了

清家 尚美

主査 黒岩 俊哉 副査 大日方 欣一 井上 友子

## 研究背景

「四島コレクション」は、株式会社福岡シティ銀行（現・株式会社西日本シティ銀行）元頭取の四島司が、企業メセナの一環として美術館設立を目指し、1970年代から1990年代後半までの四半世紀余りに亘り、銀行及びその関連会社所有の企業コレクションである。最盛期にはアメリカ抽象表現主義の作品を頂点とする200点を超える秀逸なコレクションが形成されたが、1998年に福岡シティ銀行経営安定化のため、美術館設立構想は断念され、コレクションの主要な作品から約半分近くが売却され、散逸した。残された100点余りは、現在、西日本シティ銀行に受け継がれているが、十分な調査研究がなされないまま現在に至っている。

## 研究目的

本論文は、これまで誰も定義していない「四島コレクション」を、「美術館設立のために、四島司により収集された、福岡シティ銀行および関連グループ所有のアートコレクション」と定義とし、「四島コレクション」が目指したものの、その全貌と意義を調査研究し、記録することを目的とした。

## 研究概要

まずは銀行経営者である四島司がアートコレクターと言えるのかの問題提議を行い、四島の文化人としての側面を考察した。次に、「四島コレクション」のきっかけとなった福岡相互銀行本店を設計した磯崎新の影響について考察した。最後に、「四島コレクション」の形成についてその過程を3つの期間に分け、各期の主な作品（作家）について、収集時期に沿って考察した。

### ■ I期 — 「四島コレクション」の黎明期

四島は磯崎から紹介された作家から派生して、抽象画を中心に幅広く作品を収集した。この時期の収集作品は、点数は多いものの、おしなべて小さなサイズの作品が多い。ここでは、この時期の代表的な作家として、ピカソとルシアン・フロイドを取り上げた。

### ■ II期 — 「四島コレクション」の充実期

1970年代後半から、四島は独自の鑑識眼を磨き、コレクションを充実させていく。「四島コレクション」の代表作がこの充実期に、画商・株式会社マウンテン・トータス代表取締役の亀山茂輝の仲介により収集されているのが特徴である。ここでは、亀山の仲介により、特に注目された作品、ジャスパー・ジョーンズ、ピエト・モンドリアン、マーク・ロスコを取り上げた。

### ■ III期 — 「四島美術館」設立に向けて

1990年代に入ると、亀山に代わり、福岡地所に入社した三宅伸一がニューヨークを拠点に四島に情報提供する役割を担い、美術館設立の準備をすすめた。四島は、野外彫刻（パブリックアート）にも注力し、ヘンリー・ムーアやシャピロなどが設置された。そして、キーファーの作品収集で「四島コレクション」は山場を迎えた。

### ■ 「四島コレクション」の全貌 — 最盛期の収集内容と終焉

1997年の辰野登恵子の作品収集が最後となった。翌1998年、四島は美術館設立構想を断念し、1999年から2004年までの間にコレクションの約半分が売却された。

## 成果・まとめ

「四島コレクション」の意義は、作品の内容もさることながら、その根底にある、四島一二三、四島司、そして甥の榎本一彦に受け継がれた「四島イズム」なのではないか。結果として四島が目指した美術館構想は潰れてしまうが、そのひとつの原因として、その時代の福岡という地域社会や経済状況、および美術動向などにおいて、新たな美術館を開設するための共感を得ることが、時期尚早だったのではないかと、という仮説を導いた。



## 指導教員コメント

福岡にある「四島コレクション」について調査・研究を行い論文を完成させ提出した。該当学生は銀行員であり、社会人学生として博士前期課程に2年間在籍しその間に上記内容の研究を粘り強く行った。最盛期の半分ほどになってしまった四島コレクションを現在管理する者として、また四島コレクションが形成される過程を実際に目撃してきたという立場を活かし、貴重な資料を調査・検討し、関係者へのヒアリング等を行いながら、「四島コレクション」の意義や意味を考察した。本研究で導かれた成果は、今後も学会等で発表する予定である。

黒岩 俊哉